

～お葬儀屋さんのひとりごと～

葬にまつわる体験談集

■ いやがる着物で旅立たせた後悔 [男性 57歳]

先年、妻をガンで亡くした。深夜に病院で息を引き取った後、看護婦さんから「湯灌をしますので、遺体に着せるものをご用意ください」と言われて、ハタと困った。亡くなる半月程前から病院に泊まり込んでいたため、病人が汗を書いたときの着替え程度は用意していたものの、永の旅立ちに着せて行かせるようなものではない。とくに、その時手元に残っていたのは、妻が「この寝巻は好きじゃない」と言って、袖をとおしたがらなかった洗いざらしの浴衣一枚だったから、なおのこと困惑した。急いで家に帰って持ってくるからと頼んでみたものの、忙しい夜勤の看護婦さんはウンと言ってくれない。結局、妻が嫌っていたその浴衣で間に合わせる事となったが、遺体を家に運んでからも、ずっと心残りだった。しかし、いまさら着替えさせるわけにもいかず、今思い返してもせめてもう少しマシな着物を着せて旅立たせてやりたかったと、後悔の念にかられる。今は、不慮の事故のようなケースを除いて病死の場合は、病院で亡くなる事がほとんどであり、それも時間を選ばない。いざと言う時私のように、心ならずも死者の意に添わぬ着物を着せて湯灌せざるを得ない場合も多いと思う。必ず近く訪れる家族の死を前にして、動転していることが多く、なかなかそこまでの心配りはできないが、やはり、後に悔いを残さぬためにも、準備すべきものは準備しなければならない。葬儀当日の次第や段取りは葬儀社が心得ているから、滅多に失敗はないが、それ以前の親族の心得として、湯灌に際しての死装束には、せめて何を着せて旅立たせるかを、事前の覚悟の一つとしてしっかりと心に決め、病室の片隅にでも目立たぬよう用意しておくべきであると思っている。

■ 嬉しいお葬式 [新潟県 男性 67歳]

お手伝いさんが、「母の様子がおかしい」と知らせにきた。急いで台所へいくと、母が妙な目付きで突つ伏していた。昼食中の出来事である。以後一言も口をきかず、母は、2日後この世を去った。84歳の生涯であった。母には子供が5人いたが、2人の子供に先立たれ、末っ子の私と地方の町で暮らしていた。私も既に52歳。常に抱く一つの危懼があった。それは、いつ第3の悲劇が突発するか？の恐れである。もし私が先に旅立てば、母はどんなに嘆き悲しむことだろう。これ以上、子の葬式を味わせる訳にはいかぬ。何としても、私が見送らねば……頭はその事で一杯だった。親不孝な考えだろうか？それとも親孝行だろうか？葬儀は私一人の肩にかかった。次兄と長姉がいたが、一人は遠く、一人は高齢だ。だから万般、妻と相談してやる他なかった。葬儀店の依頼は勿論、寺との交渉、お通夜の段取り、葬儀当日の進み、その後の料亭での客のもてなし……諸々を一気に片付けねばならない。細かい事が一杯で、一つおとしても大変だ。そこで、進みごとにすべての用事を箇条書にした。更にそこから必要事項が発生するし、それも又書く。大学ノート2頁にぎっしり。すんでいくものから消すことにする。でないと、どうなったか迷う。電話は何度かけまくったことか。通夜の晩は殆ど睡眠出来なかった。それ程細心にメモし処理していったに拘らず、火葬場への到着の際“埋葬許可証”持参を失念！「よく忘れる人がいるから」と言われ、メモし用心していたのに……。ごった返して、再確認の余裕を失したのだ。が、火葬場は理解してくれ、助かった。

おときと称する料亭でのもてなしは、私たち夫婦は絶えず客への酌に回った。私は「…これで親不孝をかけずほっとしました。本日は皆さん、母のことを思いながら十分楽しく過ごして下さい。」と挨拶した。葬儀社の助力で万事やれたのである。職業とはどんなものでも役に立ってくれる。

■ 縁起の悪い話 [愛知県 主婦 46歳]

昨年初め、夫の父親が80才という高齢で他界した。夫は長男であったが、勤めの関係から親とは別居していた。葬儀の不慣れはすべて葬儀社さんにお任せすることで、つつがなく事を運ぶことができたが、問題はその後にあった。本来なら焼場からお骨はその足で墓地へ納骨というのがこの在の習わしのようなようだった。ところが80才にもなる老人2人をおかかえておりながら、まったく不用意にも私達はその時墓地をもっていなかった。迂闊だった訳ではない。あえてそれに目をつぶってきたことには理由があった。かつて一度だけ娘の私の口から墓地の話を持ち出したことがあった。ところが普段穏やかな姑が頑固なまでに難色を示した。要は縁起の悪い話だということである。確かに高齢者を前にお墓の話は酷だったかも知れない。その時私に他意はなかった。ともかく避けて通れぬ現実の前で慌てたくはなかった。だが夫までがその時口裏を合せるように、親の嫌がる事を二度と口にするなと私にクギをさした。お墓の話は、そのまま暗礁に乗り上げてうやむやになった。そして今回の舅の死である。親父が何処かに心積りしてあるのだろうと夫はあの時言った。再三、再四、舅の里の寺から墓地の斡旋の促しはうけていたようだが、当面、墓地のないことが私達を慌てさせた。お骨を家に置いておくのは縁起が悪い、とまた姑が言いだした。姑を恨む気はなかった。墓地探しがはじまった。そして運よく墓地に詳しい方の助言に支えられ、四十九日法要までには墓石も間に合わせてもらった。その時の気苦労や、お世話になった方々へのお礼は馬鹿にならない額になった。墓地は、若い健康な時にこそ手に入れるべきものようだ。備えあれば憂いなし、黄泉の国へ旅立つ時位、何んの憂いもなく昇天したいものである。